

## コリント人への手紙第一 7章 1-9節 「一人ひとり神からの賜物がある」

小池 宏明 牧師

大都会コリントにある教会は、肉欲主義と禁欲主義の両極端の影響を強く受けていた。この世の影響を強く受けて、混乱していた。

### \*結婚の勧め、既婚者の一体性

パウロは、このような両極端な行動に走る人々に勧めている。2節「淫らな行いを避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。」ここでは、淫らな性的不品行が横行している教会における現実的な解決策として「結婚しなさい」と勧めている。一方で、禁欲的な結婚生活を送っているキリスト者に対しては、4節「妻は自分のからだについて権利を持つてはならず、それは夫のものです。同じように、夫も自分のからだについて権利を持つてはならず、それは妻のものです。」と勧めている。結婚した夫婦は、互いに自分のからだは相手のものなので、相手の権利を尊重するように勧め、夫婦の一体性が強調されている。

### \*パウロの優先順位

パウロの本音は、7節前半「私が願うのは、すべての人が私のように独身であることです。…」パウロは、この手紙を書いた時は独身であったと思われる。パウロはユダヤ議会で投票権があったので、以前は妻帯者であったと考えられている。しかし、パウロがイエス・キリストに出会って大回心したので、ユダヤ人の妻は離れて行った可能性がある。それでパウロは、熱心にイエス・キリストに仕えるために独身を勧めた。これは、あくまでも、パウロにとっての優先順位の現われである。パウロにとって、主イエス・キリストに仕えることが一番の優先事項であり、もし、結婚して主イエス様に仕えることが十分にできなくなるなら、独身のままの方が良いと考えたのだろう。それほど、パウロはいつもキリスト中心に生きると決断していた。しかし、パウロは、譲歩として、結婚せずに情欲に燃えて不品行に走るよりは結婚した方がよい、と言う。結局は、7節の後半にあるように、一人ひとりが主なる神様から与えられた人生を歩むことに尽きる。「…しかし、一人ひとり神から与えられた自分の賜物があるので、人それぞれの生き方があります。」

### \*主から与えられた人生を歩もう

主は、私たち一人ひとりのことを無から創り出し、罪と滅びから救い出し、すべてを知っておられるお方である。私たちは、主なる神様から最高のプレゼント（賜物）を頂いている。パウロは、主なる神様から一人ひとりにプレゼントされているそれぞれの人生を歩んでほしい、と勧めている。